

限界を打ち破るもの

★ 共同体の再生を

運動の必然性

★ 一つの解答として



私にとって、運動はどれだけ必然性があつたのかと再度問ひ直してゐる。運動は私の生活の中で、

それを権力や权威で変へることほどきなり。

しかし、家庭は、父母のやさしさに重荷であつた。母の尸史も、共同である價は持つていない。家庭は

どれだけの重みを持つて語られ、必然化されたものであつたのか。

共同体は、共同性を求める生活の場での段階段階で、個々の意識を改革していく。私たちは、自分自分を

自らへの欲望と社会の矛盾を自ら管理し追求する能力にだけいた

理論に基づく行動をなしたとしても、理論と行動を結びつける現実の重みは欠落してゐた。代行者

対決する。私たちの目指すのは、多彩な共同体による横の連合である。

父母のやさしさが、家族内の生の欲望の充足にのみそがれた時、我々はそれを切り捨てなければならなかつた。

何故自分につきつめることができないのか。へ 我々はどこにゐるのか。へ ではなく、へ こんな

近代化の尸史は個の確立の尸史だとされる。それは一面で真実であらう。しかし、それが個への介助の

共同体については、ちがひな観点から論ずることが出来る。それは共同体運動が現在のすべての矛盾を

立場にいる我々が何故動き出さないか。へ である。

尸史のみであつたと気づくなら、共同体(原始共同体、村落共同体)を見つめ直さなければならぬ。

貸金の拒否、所有の廃止などの点で私たちに肉体的な解放のイメージを与えてくれる。

所謂反体制運動を支えてきた人たちにどうして、日常生活は何だつたらうか。私たちは、否定するべきものを、どこまでどう否定した

確かに、村落共同体は、体制をになつてきた。しかし、その中には、いつくしみ合う相互扶助の精神と、生に対するラジカルさがある。勿論

しかし、その運動は、反体制というより脱体制、逃避的である。そこでは現実の矛盾と自己の欲望の関係を

定しながら、日常生活の中にそれらを温存しようとしてはいないか

共同性 II 主体性放棄であつてはならない。したがつて、昔の共同体の回復を、ではなく、共同体の再生をと云ふのだ。

を追求し意識化していく作業はなれない。家と同じように、生きるこ

これらの欲望と矛盾を検討し問題化する作業が必要である。

私は田の尸史に共同性を見る。自然と人間の関係のよさに、切ることのできなない母と子の関係。利益の問題でなく、子を育てることが自分の

息を結んでいく。したがつて、運動としてのダイナミックさを生み出すには致つていない。

共同体は、そこに一つの解答を与えてくれる。共同体は我々の意識を根底からゆさぶり、変革していくだろう。極論すれば、体制を

模索共同体

私たちは、日常の生活と結びつかない運動の限界性を感じつつも、また、個としての限界を組織や権力

変へることより、体制を支えていく我々の意識の変革こそが問題なのだ。

人間関係が個々に介断されていく現在、各方の差異は対立をほむ

また、個としての限界を組織や権力に委任してはならないことも知つて

いる。
 ではどうするのか。答は一つ、新しい生活形態を模索すること、自ら自らで管理し追求すること、である新しい生活基礎を作ること。
 自体的な提議は次の通りです。まず共通の討論の場を創る。共通性の模索は時間をかけた人間関係の中でのみ可能であるから、生活を一緒にする。と云うことも、個人を無視した

私都村宣言

○とにかく、もうはじまった。何を、なぜと問われても、答える言葉を持たない、今ある社会の、村の、家の、人間のつながりの、人間の、男と女の、あらゆる形のものの中の一つとして居ることのへ日常の倦怠、それに、へ変らない自分へのいらだちが言葉にならぬ、へ私都村へ出発させた。
 ○土地を求めた。鳥取県八頭郡那家町破路。20世帯、冬より500坪の雪に埋もれる中国山地の山村。介校に12人の子供、二十四の瞳だ。ただし、みちこ、あけみ、ただのり、じゅんこ、せなえ、まなみ、あしほ、よさき、まさひろ、としまさ、ひでのり。
 画解りのころは、フキノトウの丘に変わり、タンボリ(ハイワナ)が泳ぐ、その里だ。

○山村が終わり、自然にかえつていく、都市がますます人と煙でよみわたっていく。その一方で、人々はまたたく避けあり、かわす言葉を持たない。らしい者は、誇りがわらへん、いのちのため、心のやうに輝かず、都市にすら住めない、ぬぐい去りたい過去、隠して生きる、叫ばない、これが、今

共同性の追求は不毛だから、一部屋2人以下にするなど、互長にやつていく場をつくることだ。その共同生活の中で、行動などを通じて学び討論していく。そこから共同体に対するイメージと可能性と手段が出てくるだろう。
 「土ともぐら」
 よし、西谷約
 千葉県松戸市胡録口333高尾荘5号

(趣意書)

○の社会の形だ。それを変えたい。
 ○共創で、大きな集会場を建てる。7月10日から8月31日まで集会場は、中心にいろいろを切り、あとは土間で構成する。丸太のイスがあったり、ゴザがあつて飯が読れもする。映画をうつせる。劇がある。詩が読める。すべての表現が可能だ。すべてのつながりが可能だ。やつてくる人は、八頭郡の青年団で、村人で、拒絶を身に傷として持つ人で、子供で、旅(芝)人で、若者で……。
 集会場の名前はまたない。全く目知らぬものがここに林をかわし、いざりて旅にでること、ふたりので住み込カクワを打つことも、あつたは、知らないままにしていること、つた。

○目的は集会場建設だけではない。それは手段だ。大きな目的は、見知らぬ人への会い、知りあふことだ。おもしろい輪をつくることだ。もちろん続かなくてもいい。
 昔あつたつながりを呼びもどし、見知らぬ人に出会い、未来にそれぞれの場で、新しいつながりをつくっていく。それに、破路部路の地形としての土地、家、村の人と

つたがり、それらすべての総和を、それらへ私都村といひ、その建設をほじめる。
 ○へ私都村へは、集まるひとりひとり、内にもったテーマを、己に社会に投げ入れる抵抗と創造の核であり、未来へいひまことVを求め、汗と涙にまみれた、ひとりひとりの面影である。
 連絡先
 千葉県松戸市 3332
 岩井康子 宅 電話 0476-571-2213625 徳永
 京都市上京区七本松丸太町上ル 東入ル 栄和荘 20号
 山本和子 宅 電話 075-171-2343 (平松)
 鳥取県八頭郡那家町破路 電話 0851-2351 (永)
 私都村の会
 鳥取 那家町上私都 2351 (永)

○一軒の空家、一台のトラック、集会場建設のための土地化、材木代、すべてありせて、150万のお金を必要とします。カンパにご協力くだされば幸いです。右の連絡先のごとでも結構です。
 一〇〇〇円で、主体的に協力して下さることを、お願ひします。
 より、くわしく、いろいろ知りたく思われる方は、
 まぎら通信第一号
 〒105 東京都港区赤坂 4-1-1
 自然村は私都村を溯る
 岩井康子宛 申(ひまわり)

